

# 横浜国立大学「アジア英語討論会」の紹介

—短期訪問・受入を通じた国際交流—

## Introduction of Yokohama National University's

## Asia Dialogue Program:

## International Exchange through Short Visit and Short Stay

横浜国立大学国際社会科学研究院准教授 **加島 潤**

KAJIMA Jun

(Graduate School of International Social Sciences, Yokohama National University)

キーワード：双方向交流、アジア、海外留学プログラム

### 1. プログラムの概要

横浜国立大学の「アジア英語討論会」(Asia Dialogue)は、中国の協定校である華東師範大学商学院(上海)と北京師範大学資源学院(北京)を相手先とした学部学生の国際交流プログラムである。プログラムは、本学学生10名程度が上記の2つの協定校をそれぞれ一週間ほど訪問するSV(Short Visit)と、協定校学生10名程度が同じく一週間ほど本学を訪問するSS(Short Stay)からなり、滞在期間中に特定のテーマに関する英語での討論会を中心とした相互交流を行う。これらの学生の派遣・受入事業は、一部JASSOの海外留学支援制度(短期受入れ・短期派遣)を利用して行われている。

このプログラムは、平成22年度より開始されたもので、平成23年度以降は、本学経済学部の単位認定科目「英語討論」(平成23年度より、2単位)として位置づけられている。この「英語討論」という科目自体は、先行して行われていたプログラム「欧州英語討論会」の枠組みをベースとしている。

「欧州英語討論会」は、本学学生5~20名が欧州を10日~2週間程度訪問し、各地の大学の学生と特定のテーマについて英語で討論するというもので、平成19年度にはじまった。そもそもは、欧米の協定校への短期派遣留学(10ヵ月程度)から帰国した学生が、帰国後の英語でのコミュニケーション能力の維持を目的として自主的に組織し、それを教員がバックアップする形でスタートしたという経緯がある。その後、「欧州英語討論会」は回を重ねるごとに内容を充実させ、その訪問国はイギリス、ス

コットランド、アイルランド、ウェールズ、フランス、ドイツ、イタリア、トルコ、チェコ、フィンランド、マルタなど、平成 26 年度までに合計 11 カ国・地域、訪問大学は 18 校に上る（詳細については以下 website 参照。 <http://www.econ.ynu.ac.jp/international/event/debate.html>）。「アジア英語討論会」は、こうした「欧州英語討論会」で培われた経験を背景に発足した。

また、近年では、「欧州英語討論会」、「アジア英語討論会」の蓄積を踏まえて、平成 25 年度にチュラーロンコン大学（タイ）、平成 26 年度にロイヤルメルボルン工科大学（オーストラリア）への SV を行うなど、ヨーロッパ、中国以外の地域の協定校との英語討論を中心とした学生交流も試みられている。

横浜国立大学経済学部では、これらの「英語討論」を、総合的なグローバル人材育成プログラムの一環として位置づけている。具体的には、経済学部主催のエジンバラ大学（スコットランド）でのサマースクール（1 年次、1 ヶ月程度）、欧州・アジア英語討論会（2～3 年次、1～2 週間程度）、協定校への留学（2～3 年次、10 ヶ月程度）という段階的な育成モデルを想定しており、「英語討論」はより長期の留学に向けたステップとして組み入れられている。もっとも、こうした順序はあくまでモデルケースであり、上述の欧州英語討論会創設の経緯に見られる通り、協定校への留学から帰国した学生が自らの英語能力の維持・発展のために利用するケースも多い。特に、「アジア英語討論会」の場合、欧米の大学への留学を経験した学生が、アジア（中国）との国際交流にも関心を抱いて参加する形が散見される。こうした留学経験者の参加は、プログラム自体の活性化はもとより、他の参加者の留学に対するモチベーションを高める効果をもたらしている。

## 2. 実施事例の紹介

ここでは、「アジア英語討論会」の具体的な実施状況について、平成 26 年度のケースにもとづいて紹介したい。まず年間スケジュールを示すと以下の通りである。

平成 26 年 4 月	参加者の募集・選考
5 月	メンバー確定、SV 討論会テーマ決定 ミーティング・英語プレゼンテーション練習開始
9 月 18-24 日	華東師範大学（上海）への SV
9 月 24-30 日	北京師範大学（北京）への SV
10 月	SS 討論会テーマ決定
11 月 14 日	SV 成果報告会（欧州英語討論会と合同）
11 月 23-12 月 2 日	華東師範大学の SS
平成 27 年 1 月 6-11 日	北京師範大学の SS

まず、4月の段階で参加者の募集・選考が行われる。参加者は、募集前に開催される説明会にてプログラムの概要を理解した上で参加申請を行い、成績、TOEFL・TOEICスコア、日本語・英語による面接などを通じて選抜される。平成26年度について言えば、1次・2次募集を合わせて16名の志望者から3名の留学生（韓国、中国、モンゴル）を含む12名が選抜された。なお参加学生の学年は1～4年全てを含む。

5月にメンバーが確定すると、参加者には週1回のミーティング出席と英語ネイティブ講師による英語プレゼンテーション練習などが課される。同時にこの時点で、交流先との間で9月に予定されるSV時の討論テーマが検討され、平成26年度は華東師範大学とは「不平等」、北京師範大学とは「環境問題」を題材に討論することに決まった。また討論のスタイルは、横浜国立大学側がそれぞれのテーマに関する日本の現状と問題、およびその解決案を報告し、中国側は中国についての報告を行い、相互比較を通じて問題の解決方法を考えるという形を採ることとなった。

この時点から、メンバーを6名ごとの2グループに分け、上海・北京それぞれでの討論会に向けた準備が本格的にはじまった。グループごとに資料収集や情報共有を進め、プレゼンテーションの構成を練り、リハーサル報告を行ってグループ間で互いの問題点を指摘しながら完成度を高めていくという過程が繰り返された。また、この準備期間中に、華東師範大学との間でウェブ会議システムを利用した事前交流の機会を設けることができた。これは双方の学生にとって直接交流に向けた大きなモチベーションとなったようである。



メンバー内での事前リハーサル

そして、夏休み期間中の9月後半にいよいよ Short Visit 実施となる。平成26年度は、9月18日から24日まで上海（24日に飛行機で上海から北京へ移動）、24日から30日まで北京を訪問し、それぞれ約1週間の滞在であった。

華東師範大学では、主な目的である英語討論会（「現状と問題」編、「解決」編の2部構成）を中心に、先方教員による討論テーマに関連した特別講義（Economic Growth and Income Inequality in Chinaほか、全2回）の受講、近郊の施設訪問、上海市内見学等のプログラムが実施された。討論会では、事前準備にもとづいて明快なプレゼンテーションが行われた反面、双方の「不平等」の捉え方の違いや、着眼点の相違などにより議論が十分にかみ合わない場面も見られた。しかしその後のフリーディスカッションにおいて意見交換することによって、相互の認識の違いを確認し、結果的に理解を深めることができたと言える。また討論会以外の面では、華東師範大学学生の優れたホスピタリティにより、公式プログラム以外の時間帯についても行き届いたケアを受けることができた。上海滞在最後の夜となる23日には、talent show（一芸披露）を含む farewell party が開催され、日中双方が自国の歌や踊りを披露するなど、大いに盛り上がった。



華東師範大学での歓待



華東師範大学での討論会

一方、北京師範大学においても、同様に充実したプログラムが準備されていた。同じく2回の討論会を中心として、特別講義（Urbanization and Urban Ecology: A Brief Introduction ほか、全3回）の受講、市内施設訪問、万里の長城および北京市内見学という構成であった。討論会については、直前まで横浜国立大側の報告準備が整わず、宿舎で夜遅くまで作業を続ける場面も見られたが、とりわけ環境問題が深刻な北京において中国の学生と率直に議論することができたことは収穫であった。また生活面では、宿舎がキャンパス内のゲストハウスであったこともあり、学生食堂の利用など中国人学生とほぼ同様の生活を体験できたことが横浜国立大生にとって印象深かったようである。



北京師範大学での特別講義



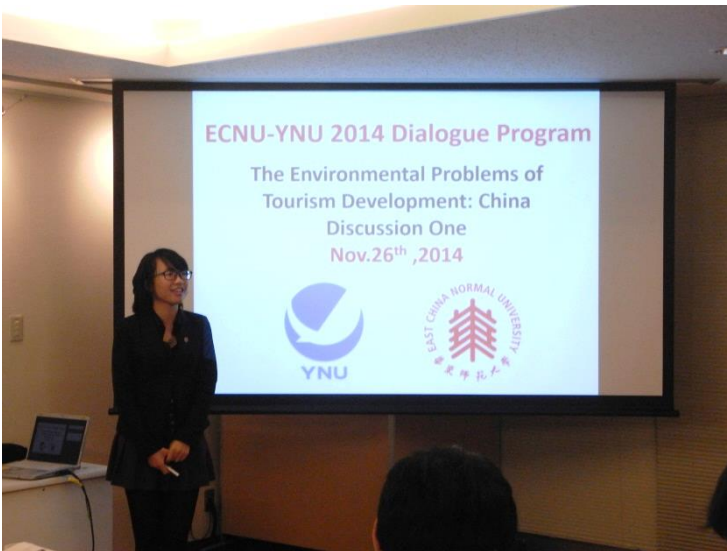
北京師範大学でのSV終了式典

SVから帰国すると、横浜国立大学では10月1日から新学期が始まるとともに、11月に予定される華東師範大学のSSの準備が開始された。討論のテーマは「開発と環境問題」を主題として、「リゾート開発、環境破壊と地域振興策」に焦点を当てることとなり、短期間のうちに報告準備が進められた。また、滞在中の身の回りの世話など受入全般の準備についても、上海で受けた手厚い待遇が念頭にあるため、学生の「おもてなし」の意識は必然的に高まり、積極的に準備に取り組む姿勢が見られた。

華東師範大学の滞在は11月23日から12月2日までの12日間で、宿舎は交通の便に配慮して横浜市中心部にほど近いウィークリーマンションを利用した。滞在中は、2回の討論会のほか、横浜国立大の教員による特別講義（「環境問題と科学技術」ほか全3回）を受講し、テーマに関連する視察先として地球環境戦略研究機関（IGES）、かながわサイエンスパーク（KSP）などを視察した。滞在期間中の宿舎から大学までの送り迎えや、視察への随行、プログラム以外の時間のアテンドなどは、すべて横浜国立大生が担当した。そうした「おもてなし」の甲斐あってか、滞在最後の夜のfarewell partyでは涙ながらに感謝の言葉を述べる華東師範大学生の声も聞こえた。



地球環境戦略研究機関（IGES）視察



横浜国立大学での華東師範大学生によるプレゼンテーション



白熱する華東師範大学生とのディスカッション

華東師範大学 SS が無事終了した後、年明け早々には北京師範大学の SS が実施された。1月6日から11日までの5日間というやや短い滞在であったが、討論テーマである「都市化」に沿って、主に神奈川県内の視察を中心にプログラムを設定した。具体的には、神奈川県庁、川崎市関連施設、神奈川県住宅供給公社・汐見台団地（磯子）への視察を実施し、各機関担当者による講義と意見交換を通じて神奈川県の都市化の過程と現状に対する理解を深めた。討論会での横浜国立大側の報告もローカルな取り組みの紹介に重点が置かれ、北京師範大側の事例にもとづく報告とも相まって、テーマをより具体的に理解し議論することができたと思われる。



神奈川県住宅供給公社・汐見台団地視察



横浜国立大側の報告へのコメントを考える北京師範大学生

以上が平成 26 年度のプログラムの概要であるが、上述の通り本プログラムは SV、SS それぞれ約 2 週間、合計約 4 週間の対面交流を中心としつつ、事前準備を含めると 4 月から翌年 1 月まで続く約 10 ヶ月間の比較的長期にわたるものであった。学生の負担も少なくないが、その分得られるものも多く、北京師範大学の一行が無事帰国し、プログラムの全過程が終了したとき、多くの学生が達成感を感じたようである。

### 3. プログラムの効果

このプログラムが参加学生に与える効果は、主に以下の点にまとめられる。



### (1) 相互訪問による相互理解の深化

「アジア英語討論会」の特徴は、何と言ってもSVとSSを組合せた相互訪問交流である。交流先を実際に訪ねることでお互いの社会的・文化的背景への理解が進むことはもちろん、SVでお世話になった相手をSSで迎えるという形式は、実践的な国際交流の経験として極めて貴重である。また、双方の参加学生はプログラム終了後も互いにSNSなどで日常的に連絡を取り合っており、プログラムから派生した独自の人間関係が形成されている。とりわけ、交流相手の華東師範大学と北京師範大学は、中国の師範（教員養成）系大学では屈指の有名校であり、本プログラムに参加する学生の質は英語能力も含めて極めて高く、彼ら・彼女らとの交流は横浜国立大学生にとって大きな刺激となったと言える。

### (2) 英語によるコミュニケーション能力の向上

プレゼンテーションやディスカッション能力を含む学生の英語でのコミュニケーション能力は、このプログラムを通じて確実に上昇する。まず討論会への準備の過程で、テーマについて英語でわかりやすく説明するという課題に向き合うことで、英語能力のみならず論理的思考能力も鍛えられる。また、討論会の緊張感のなかで、相手の報告のポイントを理解した上で批判的にコメントし、相手からのコメントに的確に回答するという経験は、大きな財産となる。日常的なコミュニケーションについても、SVとSSの期間中に公式プログラム以外で自由に交流する機会は多く設けられており、特にSS時に中国側学生を様々な場所にアテンドし、好奇心から発せられる様々な質問（例えば、日本の寺と神社の違いは何か？など）に臨機応変に回答することは、極めて実践的な英語コミュニケーションの訓練となる。

### (3) 専門テーマに対する理解の深化

本プログラムの特徴のひとつは、SV、SSそれぞれに討論テーマを設定していることであり、事前の報告準備やSS・SV期間中の関連講義、視察等の一連のプロセスを通じて、テーマに対するより深い理解が得られる。特に、平成26年度の討論会では日中比較を基軸としたため、学生は日本の事例を説明するために報告準備の段階で日本についてあらためて深く学ばなければならなかった。そして、その過程で得た基礎知識を前提に、中国側の報告を聞いて比較を行うことで、より問題を立体的に捉えることが可能になった。

### (4) チームワークを通じた成長

すでに述べたように、本プログラムは約10カ月の長期にわたるものであり、討論会での報告やSSの「おもてなし」の準備など常にチームとしての成果が求められる。その結果、参加学生の間にはチームとしての強い連帯感が生まれる。特に、チーム内外の様々な問題に対応しなければならないチームリーダーは重責であり、貴重な経験になったと思われる。また、平成26年度については1～4年の全学年の学生が参加しており、先輩から後輩へと専門知識や報告・討論の技術が伝えられていったことは極めて重要である。このプログラムで先輩から知識や経験を受け継いだ下級生が、今後他の場面

でリーダーとして活躍することが期待される。

(5) より長期の留学への動機づけ

本プログラムでのSVとSSを含む国際交流の経験を通じて、より長期の留学への意欲が促進される。平成26年度の参加者からも、すでに中国に限らず欧米・アジアの大学への留学を志すものが現れている。こうした留学への意欲は、単にSV、SSでの国際交流経験自体だけではなく、すでに述べたように、日本人の留学経験者や外国人留学生のプログラムでの活躍に触れることによって刺激される側面もあるようである。このような横浜国立大生内部での国際交流に関する知識や経験の共有も、本プログラムの重要な要素のひとつである。

以上、「アジア英語討論会」の概要と具体的な実施事例、およびその効果を紹介してきた。上述の通り、本プログラムは学内外の多くの方々や機関の支援によって成り立っており、プログラム担当者としてこの場を借りて深く御礼申し上げたい。また、本プログラムは平成22年度から5回を数え、一定のプログラム運営の経験は蓄積されているものの、解決すべき問題は少なくない。例えば、適切な討論テーマの選択やそれに合わせたSS時の視察の設定などについては、毎回試行錯誤の連続である。こうした問題については、交流先や関連機関と緊密に協力しつつ対処し、今後ともより学生にとって有意義なプログラムとして発展させていきたいと考えている。